

私たちの学年は、新型コロナウイルスの影響を3年間受け続けた学年でした。1年次は休校期間や分散登校期間など臨機応変に対応はできていたものの、授業の進度は例年に比べ限りなく遅かったそうです。そのような状況で茨高は、遅れを取り戻すためにペースをあげつつも、私たちが理解を深めるために必要な時間を必ず確保してくれました。簡単に言うと、急ぎながらも丁寧に教えてくださっていた、ということです。その結果として、知識がしっかりと身につく、自分の力になっていったのだと思います。医学コースでは、大学の教授や医学部生、現場で働く医師など、多くの方々から様々な講義を受けました。現在の医療の課題点や取り組みについてのお話を伺うこともあれば、心肺蘇生の実習を行うこともありました。2年次には、医療分野で自ら興味を持ったことについて調べ、論文を作成することもありました。また1年次から定期的に小論文対策講座を受けていたため、医学部受験では課されることの多い小論文を書く力を徐々につけることができていたと思います。3年次には面接対策もしていただき、これも医学部合格に欠かせなかったと思います。

勉強同様にコロナの影響を大きく受け、1年次には部活動がほぼ動けませんでした。そんななかでもできることを、と顧問の先生がいくつかボランティア活動のお話を持ってきてくださり、2年次は少ないながらも、ごみ拾いや募金の呼びかけなどの活動を行えました。JRC部で養った精神がそのままこれからの生活にも生きていくと思います。コロナの影響でことごとく行事が潰れていったこの3年間で一番の思い出はというと、友達と過ごした日常だったと思います。ありきたりかとは思いますが、本当にこれが一番です。特に放課後、大した話もないのに何人かが集まって教室で笑い合っていた時間がとても好きでした。今でもその頃に戻りたいくらいです。そういった何気ない日常の片隅のようなものが、受験でも最後まで支えてくれていたと思います。友達は一度なってしまえばずっとずっと続く関係ですし、何かのたびに助け合える存在です。そんな友達がたくさんで、その輪の中で過ごした3年間は、何事にも代えられぬ宝物です。

高校受験の頃、私は茨高について正直ほとんど知りませんでした。偏差値が比較的高かったり、家族や先生に進められたりしたから、という理由だけで受験しました。その後、私は県立入試に失敗し、こう言っただけですが、不本意で茨高に進学を決めました。しかし、今となっては茨高に来られてよかったと本当に思っています。まず茨高の高入生では、私と同じように受験に失敗した人たちも多く入学してきます。そのため、「この借りは大学受験で返す！」というような、やる気のある生徒がたくさんいました。その友達らに感化されて、私も勉強を続けることができた節があります。また、医学コースに参加できたことも大きかったです。中学生の頃の私は、ただ漠然と、医療系の仕事って楽しそうだな、くらいにしか考えていませんでした。それが医学コースに参加することによって、明確に、医師になりたいと思うことができました。結果として私は医学部医学科に進学することが決まりましたが、他校に行っていたら、全く別の道に進んでいたかもしれません。今の私は自分が掴んだ進路にとっても満足していますし、大学でも全力で学習に取り組めることを確信しています。一貫生とは3年生になるまでほとんど関わることはありませんでした。これもコロナの影響が大きかったとは思いますが。そのため、高入生と一貫生の両者が互いに距離感の掴めないまま3年生の混合クラスになりました。しかし、始めこそお互いそわそわしていたものの、数か月もすると見事に打ち解け合い、6月の文化祭ではクラス一体となって最高の思い出を作ることができました。また、一貫生は高入生よりも進度が早く、模試での成績も高い印象があり、高入生からすると適度な目標となっていたのも良かったです。

受験期は本当に受験勉強に追われているため、今思うとたくさんの感情が喪失していたように感じます。合格が決まった後、唐突に今までの友達と別れなくてはいけないこと、親元を離れなければいけないこと、新しい生活に一人で立ち向かわねばならないこと、といった漠然とした不安が襲い掛かってきました。これを書いている今(3/6)も不安に駆られています。そんな私のこれからの抱負は、大学でまず友達を作りたいと思っています。もちろん勉強も大切ですが、それ以上に、多くの人との関係を持ちたいです。私は友達との関係が、人生を歩む中で最も大切なことだと思っています。その関係自体が日常を豊かにし、それが将来的には私を助けてくれるものとなるとも考えています。これが私の強みでもありますし、この強みを活かして、将来、私は医師として、より多くの人助けになれることを目指し続けます。